

Frederick C. Beiser: *German Idealism. The Struggle against Subjectivism, 1781-1801*. Harvard University Press, 2002. 752 pages.

山脇 雅夫

近年の英米圏におけるドイツ観念論に対する研究水準の向上には目を見張らせるものがある。ピンカードのヘーゲル研究やブリージルのフィヒテ研究など、ドイツのものに何ら引けを取らないものが輩出してきている。本書は、その中にあっても一頭地を抜く白眉の研究である。叙述も平明直截であり、今後、ニコライ・ハルトマンの『ドイツ観念論の哲学』やリヒャルト・クローナー『カントからヘーゲルまで』、あるいはエルンスト・カッシーラーの『認識問題』第三巻とならんで、この分野における必読のスタンダードとなっていくことを確信する。

本書の著者、フレデリック・バイザーは1949年の生まれで、オックスフォードでチャールズ・テイラーの指導の下、ヘーゲルの『精神現象学』の起源に関する研究で博士号を取得した。現在はシラキューズ大学教授である。レッシングがスピノチストであったのかをめぐる汎神論論争を中心に、18世紀末のドイツ哲学の論争状況を生き生きと描き出した『理性の運命——カントからフィヒテまでのドイツ哲学』(*The Fate of Reason. German Philosophy from Kant to Fichte*, Harvard University Press, 1975)を皮切りに、多くの著書を公刊している。なお、彼の著作の翻訳には、『啓蒙・革命・ロマン主義 近代ドイツ政治思想の起源 1790 - 1800』(杉田孝夫訳、法政大学出版会)がある。

本書『ドイツ観念論』は、処女作『理性の運命』と同様、18世紀末のドイツ哲学の運動を扱ったものである。『理性の運命』で主題的には扱われなかったカント、初期フィヒテ、初期ロマン主義者(ヘルダーリン、ノヴァーリス、フリードリヒ・シュレーゲル)、初期シェリングが対象とされ、それぞれの思想家における反主観主義の取り組みが考察されている。他方、前著で考察されたハーマン、ヘルダー、ラインホルト、ヤコービ、マイモンなどは主題的には扱われておらず、その点で本書と前著は内容的に相互補完しあうものとなっている。

また本書は、通常ドイツ観念論の代表者の一人とされるヘーゲルを扱っていない。1801年という、ヘーゲルの哲学的デビュー以前に対象時期が設定されているためであるが、なによりこれは、ドイツ観念論の研究を呪縛してきたヘーゲルの影響を打ち消そうという目的のための方法的戦略である。ドイツ観念論の全体を叙述した代表的研究であるクローナーの『カントからヘーゲルまで』に典型的にみられるように、ヘーゲルを頂点とした発展としてドイツ観念論の運動をとらえることが哲学史叙述の定石であった。これは、自らの体系をカント以来の哲学運動の頂点と捉えたヘーゲルの自己理解に由来する。しかし、バイザーの考えでは、ヘーゲルの功績はそれまでに出てきたさまざまな思想を総合し、体系化したことにある。彼は、のちにヘーゲルのオリジナルとされるいろいろなアイデアが、1801年までの段階で先行者たち、とりわけ初期ロマン主義者たちとシェリングによって準備されていたことを示すことで、彼らのオリジナリティを再評価しようとしているようである。

なお、バイザーは本書の後でヘーゲルについての簡便な大変優れた入門書を公刊している(*Hegel*, Routledge, 2005)。この入門書も、筆者がこれまで読んだうちでも出色のものであることを付け加えておく。

＊

つぎに本書の全体的特徴を紹介する。

本書はカントの『純粹理性批判』が出版された 1781 年から、ヘーゲルの『差異論文』が出版された 1801 年までのドイツ哲学を対象としている。しかし、実際には、前批判期のカントから考察を始めているので、本書の論述対象は、前批判期から『オプス・ポストゥムム』までのカント、初期フィヒテ、初期ロマン主義、初期シェリングとなっている。

また、本書では、道德哲学や美学の問題は扱われない。本書が扱うのは、主観主義に対する戦いとしてのドイツ観念論である。主観主義は、デカルト主義的「観念の道 way of ideas」理論の帰結である。それは、①主観は主観の持つ観念についてのみ、直接的な知を持ち、②意識の範囲を超えた知を持たないことを主張する。確実に知られるのは主観自身の意識の内容のみであって、外なる対象はただ推論されるのみということになる。

ドイツ観念論はこうした主観主義の極致とされることが多いが、バイザーはむしろドイツ観念論の主要関心は主観主義を反駁することにあったと主張する。1760 年代、スコットランドの常識哲学の影響を受け、「観念の道」理論の論駁はドイツ哲学界共通のテーマだったのであり、ドイツ観念論もまたその流れの中にあるとされる。カントの場合のように空間内の対象の経験的実在性という形であれ、あるいは初期ロマン主義の場合のようにイデア的理念の実在という形であれ、意識の外界の実在性はドイツ観念論に共通する課題であった。本書が扱うのは、ドイツ観念論におけるこの問題である。

この観点からドイツ観念論を叙述するに際し、本書はドイツ観念論を大きく二つに分類する。ひとつは、カントとフィヒテの主観的ないし形式的観念論である。その主張の要点は、超越論的主観性が経験の形式の源泉とされることである。もうひとつは、初期ロマン主義者や、シェリング、ヘーゲルらの絶対的観念論である。その主張の要点は、主客の両方を超越した範型的な理念の存在を認め、すべてのものをその顕現と見ることである。その際、ヘルダーリン、ノヴァーリス、シュレーゲルこそが、この絶対的観念論の真の創始者として評価され、ヘーゲル学派的哲学史の枠組みの組み換えが遂行されている。

こうした哲学史の見直しを行うために、バイザーはそれぞれの思想家をそれぞれの思想家に内在的に、それぞれの思想家自身の言葉で語らせることを試みている。この点で、バイザーは分析哲学的哲学史の方法から距離をとっている。彼はむしろ、エーリヒ・アディックスやルドルフ・ハイム、ディルタイやカッシーラーの伝統につながろうとしている。その伝統は「分析的伝統よりも、哲学史をするうえではるかに優れたパラダイムを提供する」と彼は言う。

実際、それぞれの思想家の取り扱いはいわゆる説得力がある。その一端を観てもらうために、サンプルとして、カントの反主観主義がどのように叙述されているのかを、次に紹介する。

＊

本書はカントに対して 200 ページ超を割いている。その内容は優に一冊のカント研究に匹敵する

と言えると思う。研究史への目配せも行き届いている。ただし、本書の主題上当然であるが、道徳哲学や美学は扱われていない。カントが主観主義とどのように対決したかに焦点が絞られる。その際中心になるのは、カントが空間内の対象の実在性をどのように基礎づけているか、という問題である。

カントにおいて主観主義との戦いは、経験的観念論との戦いという形をとる。経験的観念論は二つに分類される。一つには、デカルトにその典型を觀る懷疑的観念論であり、外的世界についての知の可能性を疑う立場である。もう一つはライプニッツにその典型をみる、感覚をすべて混濁した幻とみる独断論的観念論である。外的世界の経験的実在性を認めないこうした立場に抗して外的世界の経験的実在性を証明すること、つまり経験的実在論を擁護することがカントの課題である。このことを、バイザーは前批判期のカントの著作から跡付けていく。

前批判期の著作の中で特に取り上げられているのは、『形而上学的認識の第一原理の新たな解明』、『視靈者の夢』、『就職論文』である。

『新たな解明』に関する考察では、連続の原理と共存の原理という二つの原理が主観主義に対する戦いにおいて枢要なものとして取り出される。連続の原理は、いかなる実体も自ら変化することはできず、他の実体の作用の結果として変化することを主張するもので、実体におけるすべての変化はそれ自体のうちから生じるというライプニッツの主張に対抗するものである。この原理は、心の変化は心の外の原因から生じるという帰結を生じる。他方、共存の原理は、実体はその内的性質においては相互に独立であり、外的性質において相互に依存的であることを主張するもので、心と物体は内的性質においては相互に独立した存在であることを保証するものである。しかし、心の内なる変化が心の外なる原因によるとしても、それが悪しき靈のような存在である可能性がある以上、ここでの主張は懷疑的観念論に抗するものとしては不十分なものととどまっていたとされる。

『視靈者の夢』に関する考察では、カントがスウェーデンボルクを観念論に分類していることが注目される。物体に固有の存在を認めず、それが精神世界によって存在しているとしている点で、スウェーデンボルクはライプニッツ・ヴォルフ学派の徒である。ライプニッツが純粹理性で証明しようとしていることを、スウェーデンボルクは特殊な経験によって確立しようとしているだけである。したがって、ここでの批判の標的はライプニッツ的な独断的観念論であるとされる。

『就職論文』において、カントは自説を観念論から区別しようとするが、ここで言われる観念論はプラトンのないしエレア派的それである。『プロレゴメナ』での定義に従えば、エレア派観念論の特徴は、感覚と経験による知を幻にすぎず、知性のアイデアにのみ真理性があるとする点である。この点で、カントはライプニッツもこの伝統に属するものと見なす。この伝統に抗してカントは、感覚を通した認識の真理性を保証することを目指す。空間・時間は客観的なものではないが、それらは何かが我々に対して現象するさいの必然的条件であり、感覚を確固とした法則に従って配置する。したがって、空間・時間における事物に関して確実な認識が可能であるとされる。

さらに、この時代のカントの考えをよく示すものとして、ランベルトとメンデルスゾーンからの批判に対するカントの対応が紹介される。カントはランベルトやメンデルスゾーンから観念論とし

て批判を受けたが、そのさい特に時間の観念性の主張がその批判の焦点になった。表象の変化はリアルなものであり、変化がリアルである以上時間もリアルなものでなければならない、とランベルトはカントを批判する。この批判に対して、カントは 1772 年 2 月 21 日付のマルクス・ヘルツあての書簡の中で応答する。カントによれば、ランベルトの批判はランベルトが主観主義の前提を受け入れていることを暴露している。つまり、心の内なる観念については確実に知られ、外的世界はこの観念からの推論によって知られるという前提である。なぜ時間の観念性には反対するのに、空間の観念性には反対しないのか、とカントは問う。批判者たちは、表象の変化は直接所与で、空間的対象は推論の対象と考えているので、時間の観念性だけを批判するのだ。これに対し、カントは空間も時間も等しいリアリティを持つことを主張する。表象の変化のリアリティを推論しなくていいのと同様に、空間内の対象のリアリティも推論される必要はない。

＊

この主張は、経験的实在論を支えるものとしての超越論的観念論の主張にストレートに結びつく。バイザーは『第一批判』A 版における超越論的観念論の考察に進んでいく。そこでは超越論的観念論はつぎのように定義される。①すべての現象は表象であり、物自体ではない。時間・空間は直観の形式である。②空間・時間において直観されるものは現象であって、たんなる表象である。こうした定義を単純に受けるならカントは認識の対象を観念に限っているのであって、「観念の道」理論の典型であるかのようにも見られる。しかしバイザーによれば、カントの戦略は「観念の道」理論を徹底化させることで、それを中和してしまうことである。

カントは外的対象の意味を二つに区分する。一つは超越論的な意味であって、この意味での外的対象とは物自体として我々の外なる対象である。もう一つは経験の意味であって、この意味で我々の外なる対象とは、空間内において我々の身体とはことなる場に存在する対象である。超越論的観念論は、超越論的な意味での外的対象の経験可能性を否定する。しかし、超越論的観念論は経験の意味での外的対象の経験可能性を肯定する。この意味での外的対象は、たんなる表象である。内官の対象のみならず、外官の対象も表象とするという点で、これは「観念の道」理論の拡大である。しかしこのように拡大されることによって主観主義の主張する内官の特権性は消失する。従来内官の対象のみが直接覚知の対象であったのが、外官の対象も同様に直接覚知の対象となったからである。もはや主観の心のうちだけが特権的に確実に知られる対象ではない。こうして超越論的観念論は、「観念の道」理論の土台を掘り崩す。

超越論的観念論が経験的实在論を基礎づけるのに対し、超越論的实在論のほうは、超越論的外在性の証明という不可能事を要求することによって、経験的实在論の基礎を掘り崩し、結果的に経験的観念論に行き着いてしまう。超越論的实在論と経験的観念論は「我々の外なる空間内の事物を知るためには、我々は表象が物自体と対応しているかどうかを知らねばならない」という知の基準を共有している。

こうして超越論的観念論においては、空間における対象は、表象から独立に表象に先行して存在しているものではない。空間内対象の实在性はその知覚それ自体とともに与えられており、対象の

存在は、単に対象の表象を持つことによって知られる。A 版の観念論批判は、バイザーによってこのように解釈される。

＊

ゲッティンゲン批評に対するカントの対応を検討した後、バイザーは『第一批判』B 版の「観念論論駁」の検討に進む。このテキストに関して、カント解釈の中でも大きな対立があり、ショーペンハウアーからポール・ガイヤーにいたる解釈者は、ここに従来の超越論的観念論からの断絶と新たな実在論を看取していることが紹介される。

バイザー自身は、観念論論駁を超越論的観念論からの逸脱とは見ない。ここで目指されるのも空間内対象の経験的実在性であることに変わりはないと主張される。しかし同時に彼は、A 版におけるそれからの進展をも認めている。A 版において、カントは時間と並んで空間の確実性を主張したが、観念論論駁ではむしろ空間が時間に対して優位に立つ局面が指摘されるようになる。すなわち、すべての人によって共有される空間という「間主観的な秩序が、私の内的意識という主観的な秩序に先行し、あるいはそれを可能にする」という主張がそこでの要点となる。

バイザーは「観念論論駁」における以前よりも実在論的な言葉づかいを検討する。観念論論駁においてカントは、恒常的なものの知覚は「私の外なる物のただの表象によってではなく、私の外なる物によってのみ可能である」(B275) と語っており、外的事物とその表象を区別している。ここに A 版との不整合が指摘され、ここで言われる「私の外なる物」が何を意味するのかが論争の対象となってきた。バイザーは、この問題に対する回答をいくつかに分類する。

第一の可能性は、これを通常の物質的対象の意味にとるものである。これはカントに超越論的実在論の主張を帰すことになり、受け入れがたい。

第二の可能性は、「私の外なる対象」が空間のうちに現象しているところの物自体とするものである。つまり、物自体の現象を指すとするもので、ポール・ガイヤーはこの立場をとる。バイザーは、この立場に一定の理解を示しつつも、やはり、カント自身が設定した知識の限界を超えるものとして、この立場を退けている。

第三の可能性は、「現象それ自体」を考える立場である。これは二重触発理論に対応するもので、現象それ自体は超越論的自我の生産物であるが、現象それ自体は経験的自我から独立に存在するものとされる。それは、経験的自我にとってはある種の物自体として存在し、経験的自我を触発する。この立場は、ファイヒンガーやアディックス、ケンブ・スミスらによって支持されてきた。しかしバイザーは、現象それ自体という概念は知識の問題を経験的意識のレベルに再現するだけとして、この立場も退ける。

こうして代表的な解釈案を退けて、バイザーは、外的事物のたんなる表象からも物自体からも区別される第三のものを指摘する。それは「経験」である。経験は、普遍的で必然的な原理に合致したところの外的事物の表象である。経験は単独の表象以上のものを意味し、諸表象の体系的な統一と法則に則った相互連関を指示している。経験は唯一の時間・空間の体系を含意しており、すべての表象はこの唯一の体系の部分である。

こうして、カントが観念論論駁で証明しようとしていることは、我々の内的経験が空間内の事物のただの表象あるいは知覚ではなく、その経験を前提するというものであるとされる。このような経験において、表象はただのイリュージョンから区別される。我々は空間内の事物の表象を持つにすぎないのではなく、空間の事物を認識する。

主観主義は、真理の基準を表象が物に一致することに置いていた。ここにおいて、表象が物と一致するという事の内実が書き換えられたことになる。表象から区別される物とは、他の表象と普遍的必然的法則に基づいて結合された全体である。個々の表象がこの全体の部分であることが、表象が物と一致することの意味となる。物と表象は存在論の意味で区別されるのではなく、形式的意味で区別される。これは、整合説的真理基準だと言える。

バイザーは、観念論論駁が置かれたテキスト上の位置からも、この解釈は裏付けられるとする。観念論論駁は「経験的思惟の要請」の後におかれているが、この議論の中心は様相のカテゴリーが経験の可能性の条件であることを示すことにある。カントは、概念の現実性を示すためには、経験の類推に基づく他の知覚との結合が示されればよいと主張しているのである。

＊

バイザーは、カントによる主観主義との戦いが『オプス・ポストゥムム』にまで続いていることを主張する。ここでカントは、それまで統制的意味しか認めなかった、経験の体系的統一の理念に構成的意義を与え、経験の超越論的条件としたと主張される。

何がカントをして批判の仕事継続させたのか。バイザーによれば、カントを突き動かした問題は、「自然学の形而上学的基礎から物理学への移行問題」である。『第一批判』以来カントは、悟性の一般的カテゴリーと物理学の特定の法則との間のギャップを考察してきた。悟性のカテゴリーはどの特定の法則が真であるかと決定することができない。1786年の『自然学の形而上学的基礎』は、たしかにある程度このギャップを埋めはしたが、そこで展開された原理もなお普遍的に過ぎ、経験的物理学の法則の必然性を示すには至らなかった。

1798年の8月と9月に書かれたと思われる『オプス・ポストゥムム』第三コンヴォールトで、カントは自然学の形而上学的原理と経験的物理学との間の媒介概念の必要を論じる。そうした媒介概念として挙げられるのが物質の運動力である。運動力は、その存在が経験的に与えられるものとしてアポステリオリであるが、同時にその構造がカテゴリー表に基づいて規定されうるものとしてアプリアオリでもある。その形式がアプリアオリだが、その質料はアポステリオリなものとして、運動力の体系は形而上学的原理と経験的物理学との橋渡しをするのに適する。

バイザーは、この運動力の議論を『第一批判』の図式論に類比的なものと評価する。図式論の根本問題はアプリアオリな概念を経験にいかにして適用するかにあった。運動力についての議論においても同じ問題が扱われていると言える。ただ異なるのは、『第一批判』の図式論が内官を対象としたのに対し、ここでの運動力の体系は外官において作用する点である。

1799年5月から1800年4月の間に書かれたとされる第五コンヴォールトと第十コンヴォールトにおいて、カントは運動力の体系を知覚の説明に用い始める。知覚主体は自然の運動力の一つとさ

れ、知覚はそれに作用する運動力と、それへの反作用の結果として記述される。知覚主体は運動力の体系の中に組み入れられる。こうして、運動力は「経験の可能性の原理」(第十二コンヴォールト、585 ページ)とされる。空間における何かを知覚するためには、他の物理的物体と動的な相互作用のもとにある物理的身体を持たねばならない。運動力は、経験の可能性の超越論的条件である。

経験の超越論的条件に関するカントの立場の展開が、特に明瞭に表れているものとしてバイザーが注目するのが「エーテル」についての議論である。エーテルはすべての運動力の基体であり、運動力の統一と相互結合の基礎である。カントにとってエーテルは経験の必然的統一の定式化であった。空間における物体の知覚は、空間が全体として充満しており、恒常的な運動のもとにない限りは生じない。エーテルは、そうした自然の体系的統一の原理である。ここにおいて、『第三批判』において単に統制的意味しか認められなかった体系的統一が構成的地位を獲得したと解釈される。ただし、エーテルの存在は可能的経験の条件である限りで問題とされるのみであって、この条件を離れたエーテルの自体的存在は問題とされない。カントは超越論哲学の基準を守っているとされる。

＊

以上、バイザーによるカント解釈の要点を紹介した。超越論的主観性の問題や、カントとヒューム、カントとバークリーの関係など、紙幅の関係で触れることのできなかった問題も多い。が、バイザーのカント解釈の姿勢は伝えられたのではないかと思う。ヘーゲルを中心にドイツ観念論の勉強を続けている筆者には、彼の論点の成否を細かく検討するために必要な知識が欠けているが、カントに内在的にカントの問題を追及しようという姿勢には大いに共感する。また、前批判期から『オプス・ポストウムム』までの発展史を跡付け、書簡やレフレクシオンにも目を配った丁寧な解釈には大いに説得力を感じる。

フィヒテ、初期ロマン主義、シェリングに対する解釈についても、その考察は堅実である。自我の哲学者として主観主義の権化のように理解されがちな初期フィヒテ哲学を、バイザーはむしろ、カント同様、形式的観念論であるとする。絶対的自我の統制的ステイタスの指摘と合わせて、妥当な解釈であると思う。また、プラグマティックな観念論として初期知識学を理解し、『確実性の探究』のデューイとの類縁性を指摘するなど、新たな研究領域の可能性も示唆している。

ヘルダーリン、ノヴァーリス、フリードリヒ・シュレーゲルについての論述も、これら初期ロマン主義者たちの哲学者としての重要性を明らかにするものとなっている。シェリング・ヘーゲルの哲学的発展においてヘルダーリンが果たした役割が明確に描き出される。また、ヘルダーリンにおける自己放棄やノヴァーリスの自己疎外、シュレーゲルにおける歴史の弁証法的展開など、のちのヘーゲル哲学体系の礎石となるアイデアの多くが彼らによって準備されていたことが示される。これはまた、ヘーゲルの体系を初期ロマン主義から見るというパースペクティブを与えるものでもある。

シェリングについては、自然哲学がシェリング哲学全体の中で占める枢要な位置に注目する。同一哲学について、シェリング自身が超越論哲学と自然哲学の対等性について語ってはいるものの、

実際には、同一哲学は自然哲学に基礎を持つものと評価され、「同一性の体系は、実際には、その最高のステージないしポテンツが知識学であるところの自然哲学である」とされる。自然哲学を、「主観と知識の対象とを全体としての自然のうちに位置づけることによって認識の起源と可能性を説明しようとする」自然主義的認識論であるとする評価は大変魅力的である。

このように、本書は大変優れた研究であるが、あえて難を言うなら、この研究では後期のフィヒテ、後期のシェリングが扱われていないことである。後期のフィヒテの像の理論、後期シェリングの積極哲学はそれぞれ高次の实在論というべきものである。これが、本書の描き出した「主観主義に抗する戦い」とどう接合するのかは、興味深い問題である。しかし本書ではそれは考察の外に置かれている。パイザーはヘーゲルのオリジナリティに対しては否定的であるが、ヘーゲルを後期フィヒテや後期シェリングの問題圏のうちに置き、彼における高次の实在論のありようを見極めようとするなら、ヘーゲルの独自性も見えてくるように思われる。しかし、これは1781年から1801年という期間を対象とした本書に対してはないものねだりというべきところだろう。(こうした問題圏への導入としては、以下の書物を挙げておく。ヤンケ『絶対者の像について』Janke, W., *Vom Bilde des Absoluten*, Gruyter, 1993)。

いずれにしても本書は、同じ著者の『理性の運命』と合わせて、ドイツ古典哲学を学ぶ者にとって、一度は通るべき先行研究である。最初に述べたように本書は、戦前のクローナーやハルトマンの研究と並んで、いやそれどころか、それらを超えたスタンダードとなっていくとすら思われる。歴史的研究であるが、ただ事実を並べるだけの伝記的叙述に堕していない。哲学史を通して哲学の問題が追及されていることを実感できる。それは、本書が、歴史的事実をではなく、ドイツ観念論の哲学者たちのおこなった認識を認識しようとしているからだろう。